

## フランシス・ベーコンにおけるトリプティックの成立について ——《ある磔刑の足元の人物たちのための三つの習作》(1944)を中心に

尹 志慧

### はじめに

フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1909-1992) は生涯、同じサイズ縦長三枚の絵を横に連ね三枚一セットにする、「トリプティック (Triptych, 三幅対)」と名称した作品を多数制作した。その数は、198 × 145cm の大型が 28 点、35.5 × 30.5cm の小型が 40 点あまりに及ぶ<sup>(1)</sup>。この形式は、1962 年に始まるものである。

一方、1944 年に完成した《ある磔刑の足元の人物たちのための三つの習作》(*Three Studies for Figures at the Base of a Crucifixion*, 1944) (以下、《44 年作》と称する) について、1962 年のデイヴィッド・シルヴェスター (David Sylvester) とのインタビューの中で、ベーコンはそれを自身の画業の始まりと位置づけている。この位置づけは、シルヴェスターやジョン・ラッセル (John Russell) などの研究者によっても肯定されてきた。というのも、《44 年作》から、以後のベーコンの絵画制作における三つの特徴的要素が表れ始めたからである。その要素とは、1940 年代のベーコンの作品に顕著に表れているバイオモルフィックなイメージ、1965 年まで続く磔刑というテーマ、そして、トリプティック形式である。

《44 年作》は、1962 年のこのインタビューの中で《ある磔刑のための三つの習作》(*Three Studies for a crucifixion*, 1962) (以下、《62 年作》と称する) と共に磔刑のトリプティックとして取り上げられて以来、ベーコン自身によりトリプティックと呼ばれ始め、先に名前を挙げた研究者以外にも、デイヴィッド・ボクサー (David Boxer)、ヒュー・デイヴィス (Hugh M. Davies)、マーティン・ハンマー (Martin Hammer) などの研究者たちにより、ベーコン初のトリプティックとして見なされている。

これに対して、本論文は、《44年作》が1962年のシルヴェスターとのインタビューまではトリプティクとして位置づけられていなかったと主張するものである。本主張の検証のため、第一に、《44年作》とベーコンのトリプティクにおける三枚が揃う過程を検討し、三枚の組み合わせの着想は、その最初期において、確固たるものではなかったことを理解する。第二に、《44年作》が初めて出品されるまでのギャラリー側とのやり取りを通して、1945年の初出品の際もトリプティクではなかったことを確認する。そして、第三に、出品歴のタイトルの変遷を検討することで、《62年作》発表3年前の1959年サンパウロ・ビエンナーレまで、《44年作》はトリプティクと称されていなかったことを確認する。これらの検証を踏まえた上、《44年作》は1962年からトリプティクとして扱われ始め、1988年の《1944トリプティクの第2バージョン》(Second Version of Triptych 1944, 1988)の制作により、トリプティクとしての地位を獲得したと結論付ける。

## 1. 《44年作》及びベーコンにおけるトリプティク

「トリプティクではない《44年作》」を検証する前に、ベーコンと《44年作》の簡単な紹介から始める。ベーコンは1929年、最初の油絵を制作し、1933年制作の《磔刑》(Crucifixion, 1933)はハーバート・リード(Herbert Read)によりArt Now(1933)でピカソと共に紹介されることもあった。1934年2月にはロンドンの友人の家の地下<sup>(2)</sup>で初めての個展も開いたが、あまり注目されず、また1936年のロンドン国際シュルレアリスム展に応募した作品は、あまりシュルレアリスム的ではないという理由で展示を拒否される。再び制作活動にとりかかり、先にも触れたように、自らの画業の始まりと位置づけた《44年作》を1945年4月、ロンドンのルフェブル・ギャラリー(Lefevre Gallery)のグループ展<sup>(3)</sup>で発表した。

「人間の姿に近く、かつ徹底的に歪曲(distortion)された有機体のイメージ(biomorphic figures)」<sup>(4)</sup>を描きたかったという本作品の三人は、1920年代終わりのピカソの絵に影響されている。首を長く伸ばし、歯を剥き出しにしているこの人間とも動物とも言い難い三人は、1945年発表当時多くの議論を呼び起こし、ベーコンの名前をロンド

ンのアートシーンに記憶させる作品となった。当時この作品に付いた一番多い形容は「悪夢 (Nightmare)」であった。また、美術評論家のラッセルの評価は、この展覧会と一緒に出品したマシュー・スミス (Matthew Smith) やグラハム・サザランド (Graham Sutherland) に対する熱弁とは違って、「ギニョール (guignol) の解剖学にもっとも近い」<sup>(5)</sup> との簡単なものであった。これは、後の 1971 年の著作の「イギリスの絵画はこの作品を基準として前後に分かれる」<sup>(6)</sup> といった再評価に比べると、かなり低いものであった。《44 年作》が発表された 1945 年 4 月、イギリス人は初めて BBC のナチス強制収容所のニュースに接した。このような歴史を背景に、《44 年作》は 20 世紀の非人間性の恐怖の象徴となり<sup>(7)</sup>、その後サム・ハンター (Sam Hunter) やハーバート・リードなどにより実存主義的文脈の中で語られるようになった。しかしベーコンは、歪曲された有機体のイメージという類似点からしばしば比較対象になっていたシュルレアリスムや実存主義的解釈からは常に距離を置いた立場をとっていた。

ニューヨークにもギャラリーを持っていたマールボロ・ファイン・アート (Marlborough Fine Art) に取引画廊を代えた 1958 年以後、ベーコンはアメリカでも作品発表機会を得、加えて 1962 年には初の大規模な個展をロンドンのテート美術館で開催した。この 1962 年という年は、シルヴェスターが、《44 年作》を「トリプティック (Triptych)」と称したインタビューが行われる最初の年でもある。シルヴェスターはインタビューの中でこの言葉を用い、それはテート美術館展の直後に行われたものであった。ベーコンの友人であり大ファンでもあったシルヴェスターは、1965 年のインタビューでは、《44 年作》、《62 年作》、そして《磔刑》(Crucifixion, 1965) (以下、《65 年作》と称する) の 3 点をいずれも「磔刑」と「トリプティック」と呼び、ベーコンもその呼称に同意しながらインタビューに応じている<sup>(8)</sup>。

ベーコンが、1979 年には、「描くのが一番好きなのはトリプティックである」<sup>(9)</sup> と述べているように、彼はトリプティックを好んで制作した。本来祭壇画から由来する形式である「トリプティック」は、ベーコンにおいては、縦長三枚の画面を横に連ね一つの作品とするものを指して使われている。しかしながら、《44 年作》をトリプティックとするならば、《62 年作》で再び登場するまで 18 年間の空白期間がある。1953 年の《人間の頭部の三習作》(Three Studies of the Human Head, 1953) は、縦長三枚のキャンバスを

横に連ねて展示する形式のものであるが、《44年作》と同様に、シルヴェスターによる大型／小型トリプティックの分類に含まれていない。ベーコンはトリプティックが気に入る理由を、「イメージが連続して浮かんでくるからであり、自分はトリプティックだけではなく、五枚も六枚も連続物として描くことができるが、三枚というのが一番バランスのとれた単位だと思うから」<sup>(10)</sup> であるという。また、映画フィルムの連続的イメージの並び方を、そして特に小型トリプティックの肖像画においては、警察の記録のように右側から見た顔、正面を向いた顔、左側から見た顔という具合を意図していた<sup>(11)</sup>。にもかかわらず、同じ人間の頭部を三様に描いた《人間の頭部の三習作》は小型トリプティックとも分類されず、「磔刑」にまつわる《44年作》、《62年作》、《65年作》から「トリプティック」という呼称が始まっていたのである。1953年の《人間の頭部の三習作》は、当初ベーコンが右の絵を完成した後、この一枚が売れなくなり、後に二枚を描き加え三連作として発表したものである<sup>(12)</sup>。つまり「3」という数は、はじめから決まっていたものではなかった。

## 2. 《44年作》の初出品までのギャラリー側とのやり取り

初めて《44年作》が出品されたのは1945年4月、ロンドンのルフェブル・ギャラリーのグループ展であった。ベーコンが一貫してこの作品の制作年を1944年であると主張していることから、出品前の制作はおそらく1944年には終わっていたと推測される。出品の依頼は1945年2月にあった。当時のルフェブル・ギャラリーのディレクター、ダンカン・マクドナルド (Duncan McDonald) は「フランシス・ベーコンのところを訪れ、4～5点ぐらい出品できるか尋ねた」<sup>(13)</sup>。この展覧会と一緒に出品されたベーコンのほかの作品が《ある風景の中の人物》(Figure in a Landscape, 1945)の1点のみで、合計4枚のキャンバスが出品されている。そして、マクドナルドがベーコンを訪ねた際にトリプティック (Triptych) の言及がなかった点からみると、1945年の2月の時点で《44年作》はまだトリプティックではなく、別々に存在していた可能性は非常に高い。また、《44年作》に類似している《人物のための習作》(Study for a Figure, c.1944)や《自動車を降りる人物》(Figure Getting out of a Car, c.1945)、《無題》(Untitled, c.1943-4)などの

存在から、ベーコンは最初からトリプティックの構想を持っていたのではなく、同じモチーフを繰り返し描き、連作を制作していたと言えるだろう。

1945年の展覧会以後ルフェブル・ギャラリーのマクドナルドとの信頼関係は厚いものとなった。1947年6月マクドナルドに送ったベーコンの手紙からは二人の関係と同時にベーコンのトリプティックに対する態度も窺うことができる。

作品を持って帰るというあなたの提案はよりよいと思います。9月末か10月の上旬までには[ロンドンに]帰ります。CAS [Contemporary Art Society] に売れたもの [Figure Study II (1945-46)] と同じサイズの三つの大きい作品のグループを持って帰ります。この秋、これらを掛けられる展覧会の予定はありますか？《磔刑》[《44年作》]のように一緒に並べたいです。…(後略)。

I think your suggestion of bringing the painting back will be better. I will come back at the end of September or beginning of October. I shall have a group of 3 large paintings about the size of the one which went to the CAS. Is there any chance of your having an exhibition in the autumn in which you could hang them? They want to be hung together in a series as they are a sort of Crucifixion ... (14) .

しかし、マクドナルドの死後、1949年にハノーバー・ギャラリー (Hanover Gallery) に移った後も、ベーコンはトリプティックを制作していない。この手紙の内容と語彙の選択をみると、1949年の時点においても、三枚が揃う過程を決して「トリプティック」という認識のもとで行っていなかったことが分かる。

### 3. 展示歴の変遷

最後に、《44年作》の展示歴、とりわけ1962年までの出品名と展示方法を検討し、本作が《62年作》発表3年前の1959年サンパウロ・ビエンナーレ出品時までトリプティックではなかったことを確認しよう。

《44年作》は数回の出品名の変更を経た（「参考表 - 《44年作》の展示歴」参照）。2回目の展覧会である1946年のグループ展でそのタイトルは《十字架の足元の人物たちのための習作》（*Studies for Figures at the Base of a Crucifix*）に変わっている。この点から、絵画の主題の力点が「磔刑(Crucifixion)」から十字架(Crucifix)の下の「人物たち(Figures)」に移動したと理解することができる。また、この出品名からは「三つ(Three)」が消え、これらの三枚がトリプティックというより、別々の作品番号が振られた個別作品として展示されていたことが分かる。次の1949年のハノーバー・ギャラリー（Hanover Gallery）での個展では三枚が《習作Ⅰ》（*Study I*）、《習作Ⅱ》（*Study II*）、《習作Ⅲ》（*Study III*）と分かれて展示されており、ベーコンのトリプティックというアイデアは1949年の時点でも確固たるものではなかったことが再度確認できる。次の1954年のヴェネチア・ビエンナーレへの出品の際には《より大きい構成のための三つの習作》（*Three Studies for a Larger Composition*）に変わっており、1959年のサンパウロ・ビエンナーレでも同じ出品名が使われている。このような「磔刑」の無いタイトルに変わった理由は、本来は大きい磔刑を描き、その足元にこの三人を置くつもりであったというベーコンの言及からなるものであり、所蔵先のテート美術館の判断によるものであった<sup>(15)</sup>。そして、実現はされなかったものの、《44年作》を「また始めるかもしれないより大きい磔刑の足元に置くためにスケッチされたもの」<sup>(16)</sup>であると1959年にテート美術館に伝えた事実は、《44年作》が習作であると同時に磔刑の足元に置かれる人物たちの連作の一部であった可能性を補強していると考えられる。

## おわりに

以上の三つの検証をまとめてみよう。まず、ベーコンのトリプティックにおける三枚が揃う過程から、三枚の組み合わせの着想は確固たるものではなかったことが分かった。次に、《44年作》に関するベーコンとギャラリー側とのやり取りから本作品の初出品時の1945年まで、そして、その後の手紙から1949年までもトリプティックとして認識されていなかったことを、最後に《44年作》の展示歴を検討することによって、トリプティックとしての《44年作》の成立は1959年のサンパウロ・ビエンナーレまで

も確固たるものではなかったことを確認した。1959年のサンパウロ・ビエンナーレまで出品名の変更や個別展示がなされるほど、確固たるコンセプトをもっていたわけではなかった《44年作》は、1962年のテート美術館展の為に描かれた《62年作》と共に「磔刑」の名のもとにトリプティックと呼ばれ始め、その性質を獲得したのである。そして、ベーコンが晩年に《44年作》をもう一度描きなおした《1944トリプティックの第2ヴァージョン (Second Version of Triptych 1944, 1988)》の制作は、ベーコンが《44年作》を画業の始まりとして認識しているという点の反映であり、ほぼすべての大型トリプティックに「トリプティック」というタイトルを入れた70、80年代を経て、《44年作》は後からトリプティックとして位置づけられたのである。

ベーコンは1940年末から1960年代半ばまで多数の連作を描いている。1948年から始まる六枚の頭部連作、1949年に登場し、65年まで数多く描かれたベラスケスのイノケンティウスの肖像画に因んだ教皇図、1950年代後半のファン・ゴッホの肖像画の連作など、《44年作》と《62年作》の間の時期である1940年代後半と1950年代のベーコンの多数の作品は、同じモチーフを繰り返し描いたものであった。これらの連作は、まるで、1962年のインタビューで「一枚の絵にあらゆる要素を凝縮したい」<sup>(17)</sup>と言っていたベーコンの試みを表しているものではないか。無論これらの連作の存在は、展覧会が迫ってくるたび短時間内に数枚を描きあげ生乾きの状態で出品する彼の習慣<sup>(18)</sup>と無縁であるとは言えない。しかし、この時期は繰り返される同じモチーフの上でイメージの歪曲 (distortion)、人間の頭部描出の探究、彩色方法の変化など、あらゆる展開を見せた時期でもある。同じ頭部であれ、同じ教皇であれ、一枚では表現しきれなかった彼のイメージは《62年作》から転換点を迎える。すなわち、それはトリプティックという形式の使用であり、《44年作》と《62年作》の間には多数の連作が存在する。

とすると、《44年作》は、本来トリプティックというよりも、同じバイオモルフィックなイメージの三連作とみなすべきである。それに対し、《62年作》は磔刑というタイトルの下の多義的で暴力的事実を共有する三枚の結合である。磔刑に処されている右パネルの肉のような存在、暴力を受けている中央パネルの人物、そして磔刑や暴力の場面とは何らかの関係ももたない振りをしている傍観者のような左側の2人の佇ま

いが、三枚の結合によって多義性を醸しだしているのである。そして《65年作》からベーコンのトリプティックは、中央パネルを中心に左右に類似する場面を配置することで、一種の祭壇画の様相を呈し、画面中心によるトリプティックと変化していくのである。以上の点からも、《44年作》は《62年作》以降のトリプティックとはその性格が違くと再度主張できる。

ベーコンが、本来連作の性格を持ち合わせていた《44年作》を62年に「トリプティック」と認識しなおしたことが重要である。40年代後半から取り掛かる連作の出発点としての可能性を持っていた《44年作》は、1962年に改めて連作ではないものとして措定し直されたことになる。そこに、ベーコンのトリプティックの、通常の祭壇画トリプティックとは異なる秘密が隠されているはずであるが、それは本論文の今後の課題とする。

#### 註

- (1) デイヴィッド・シルヴェスター『回想——フランシス・ベイコン』（五十嵐賢一訳）書肆半日閑、2010年、107頁及び111頁。
- (2) Sunderland House, Cruzon Street, London. 後にベーコンは Transition Gallery と呼んでいる。
- (3) *Recent Paintings by Francis Bacon, Frances Hodgkins, Henry Moore, Matthew Smith, Graham Sutherland*, Lefevre Gallery, London, April 1945.
- (4) デイヴィッド・シルヴェスター『肉への慈悲——フランシス・ベーコンインタビュー』（小林等訳）筑摩書房、1996年、11頁。
- (5) Russell, John, "Round the Art Exhibitions", *Listener*, vol.XXXIII, no. 848, 12 April 1945, p. 412.
- (6) ジョン・ラッセル『わが友フランシス・ベイコン』（五十嵐賢一訳）三元社、2013年、27頁。
- (7) Gale, Matthew. "Audio transcript on Three Studies for Figures at the Base of a Crucifixion", *Tate*, November 1998, Web. 12 Jan. 2015.
- (8) Sylvester, David, *The Brutality of Fact: Interviews with Francis Bacon*, Thames and Hudson, 1987, p. 8, 12, 22, 44.
- (9) 『回想——フランシス・ベイコン』、100頁。
- (10) 『肉への慈悲——フランシス・ベーコンインタビュー』、95頁。



- (11) 同書、96 頁。
- (12) 同書、95 頁。
- (13) Hammer, Martin, “Francis Bacon and the Lefevre Gallery”, *Burlington Magazine*, May 2010, p. 308.
- (14) Ibid., p. 311.
- (15) Gale, Matthew. “Catalogue entry on Three Studies for Figures at the Base of a Crucifixion”, Tate, November 1998, Web. 12 Jan. 2015.
- (16) Francis Bacon, letter to Tate Gallery, [9 Jan. 1959], Tate Gallery cataloguing files. (as cited in Gale, 1998)
- (17) 『肉への慈悲——フランシス・ベーコンインタビュー』、25 頁。
- (18) 『わが友フランシス・ベイコン』、94 頁。

参考表 - 《44年作》の展示歴(1962年まで)

Gale, Matthew. "Catalogue entry on Three Studies for Figures at the Base of a Crucifixion",  
Tate, November 1998, Web 参照

展示順	展覧会	作品番号、出品名
1	Recent Paintings by Francis Bacon, Frances Hodgkins, Henry Moore, Matthew Smith, Graham Sutherland, Lefevre Gallery, London, Apr. 1945	no. 2, 《ある磔刑の足元の、人物たちのための三つの習作》 ( <i>Three Studies for Figures, at the Base of a Crucifixion</i> )
2	Seventh Exhibition: Adler, Bacon, Colquhoun, Hubert, MacBryde, Trevelyan, Anglo-French Art Centre, London, Nov.-Dec. 1946	no. 6-8, 《十字架の足元の人物たちのための習作》 ( <i>Studies for Figures at the Base of a Crucifixion</i> )
3	Francis Bacon: Paintings; Robin Ironside: Coloured Drawings, Hanover Gallery, London, Nov.-Dec. 1949	no. 1-3, 《習作 I》( <i>Study I</i> )、 《習作 II》( <i>Study II</i> )、 《習作 III》( <i>Study III</i> )
4	Nicholson, Bacon, Freud, XXVII Venice Biennale, Venice, June.-Oct. 1954	British pavilion no. 54-6, 《より大きい構成のための三つの習作》 ( <i>Three Studies for a Lager Composition</i> )
5	V Bienal do Museu de Arte de São Paulo, São Paulo, Sept.-Dec. 1959	Bacon 2, 《より大きい構成のための三つの習作》 ( <i>Three Studies for a Lager Composition</i> )
6	Francis Bacon, Tate Gallery, London, May.-June.1962; Kunsthalle, Mannheim, Jul.-Aug.; Galleria Civica d'Arte Moderna, Turin, Sept.-Oct.; Kunsthau, Zurich, Oct.-Nov.; Stedelijk Museum, Amsterdam, Jan.-Feb. 1963	no. 5, 《ある磔刑の足元の人物たちのための三つの習作》 ( <i>Three Studies for Figures at the Base of a Crucifixion</i> )